

看護実践国際研究センター 令和3年度 実績報告書

目 次

第1章 看護実践国際研究センターの概要

第1節 看護実践国際研究センターの趣旨と沿革	1
第2節 組織	2

第2章 看護地域貢献活動研究部門

第1節 看護地域貢献活動研究部門の概要	4
第2節 活動実績	
1 地域貢献チーム	
1 災害看護支援P J	6
2 高齢者水中運動講座P J	7
4 終末期看護研究P J	9
5 子どもと家族への支援P J	10
2 出前講座チーム	13

第3章 国際看護・災害看護活動研究部門（IRC）

第1節 国際看護・災害看護活動研究部門（IRC）の概要	15
第2節 活動実績	
1 USF／SMU学術交流P J	16
2 サモア国立大学学術交流P J	17
3 中国医科大学／揚州大学学術交流P J	17
4 カンボジア等（東南アジア地域）交流P J	18
5 ネパール交流P J	20
6 ニュースレター制作	21

第4章 学外機関連携部門

第1節 学外機関連携部門の概要	22
第2節 活動実績	
1 看護ユニフィケーションチーム	23
2 産学官連携チーム	27
3 自治体連携チーム	29

第5章 認定看護師継続教育支援部門

第1節 認定看護師継続教育支援部門の概要	30
第2節 活動実績	30

第6章 看護教員・看護管理者教育部門	
第1節 看護教員・看護管理者教育部門の概要	32
第2節 活動実績	32
第7章 キャリア形成支援部門	
第1節 キャリア形成支援部門の概要	36
第2節 活動実績	36

第1章 看護実践国際研究センターの概要

第1節 看護実践国際研究センターの趣旨と沿革

本学は、平成7年（1995年）に開学し、地域への貢献を主眼にして、教育、研究を進めてきた。

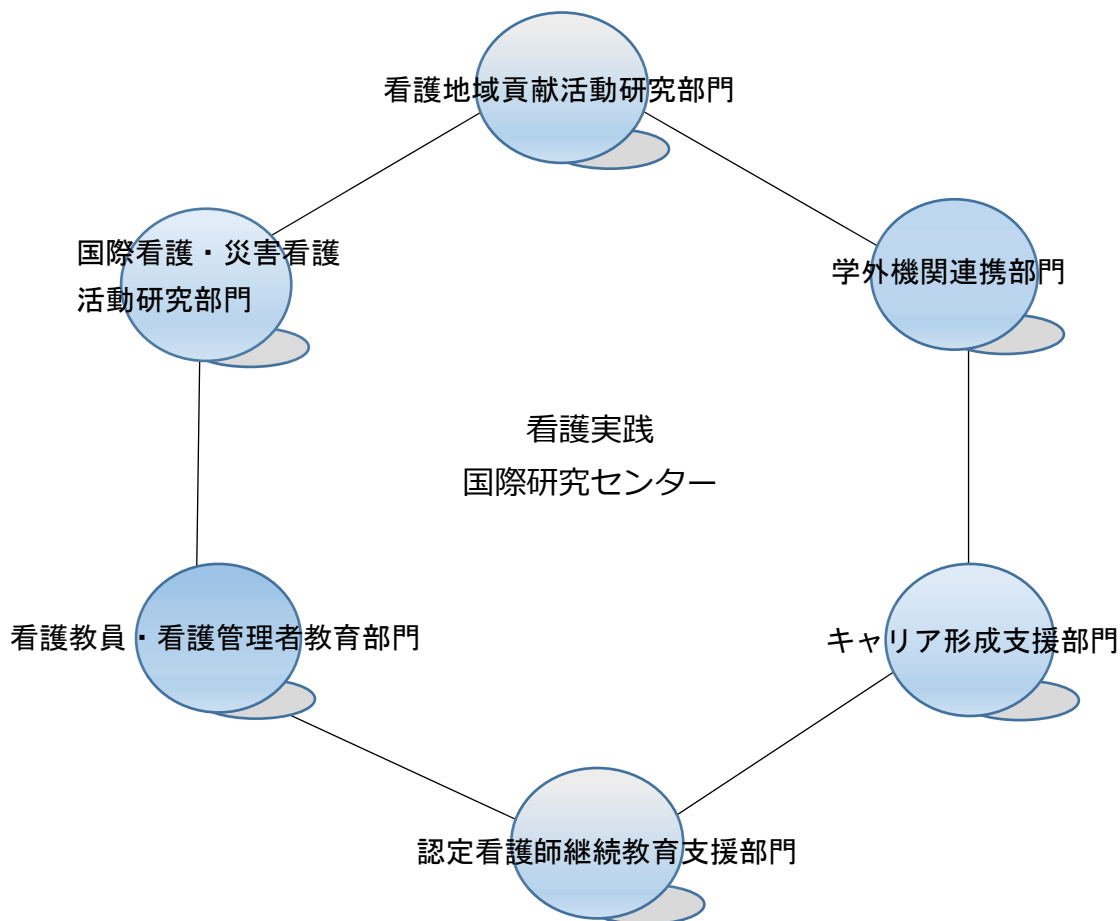
「看護実践国際研究センター」は、本学における研究の拠点であり、国際的視野の涵養を背景に置き、講座や分野などの専門的な枠を超えた研究実践活動部門として平成14年に設置された。

平成28年には組織が再編され、「看護地域貢献活動研究部門」、「国際看護・災害看護活動研究部門」、「学外機関連携部門」、「認定看護師教育部門」、「キャリア形成支援部門」、の5部門で活動を行ってきた。

また、令和元年度からは、「看護教員・看護管理者教育部門」を新たに設置し、看護教員養成講習会や看護管理者育成への取り組みを開始している。

一方、認定看護師教育部門は、認定看護師教育機関の認定期間が満了する令和元年度をもって終了した。

令和3年度は、新たに皮膚・排泄ケア、感染管理、認知症看護の認定看護師教育課程の修了生に対する支援を行う認定看護師継続教育支援部門を設置し、6部門で活動を行った。



沿 革

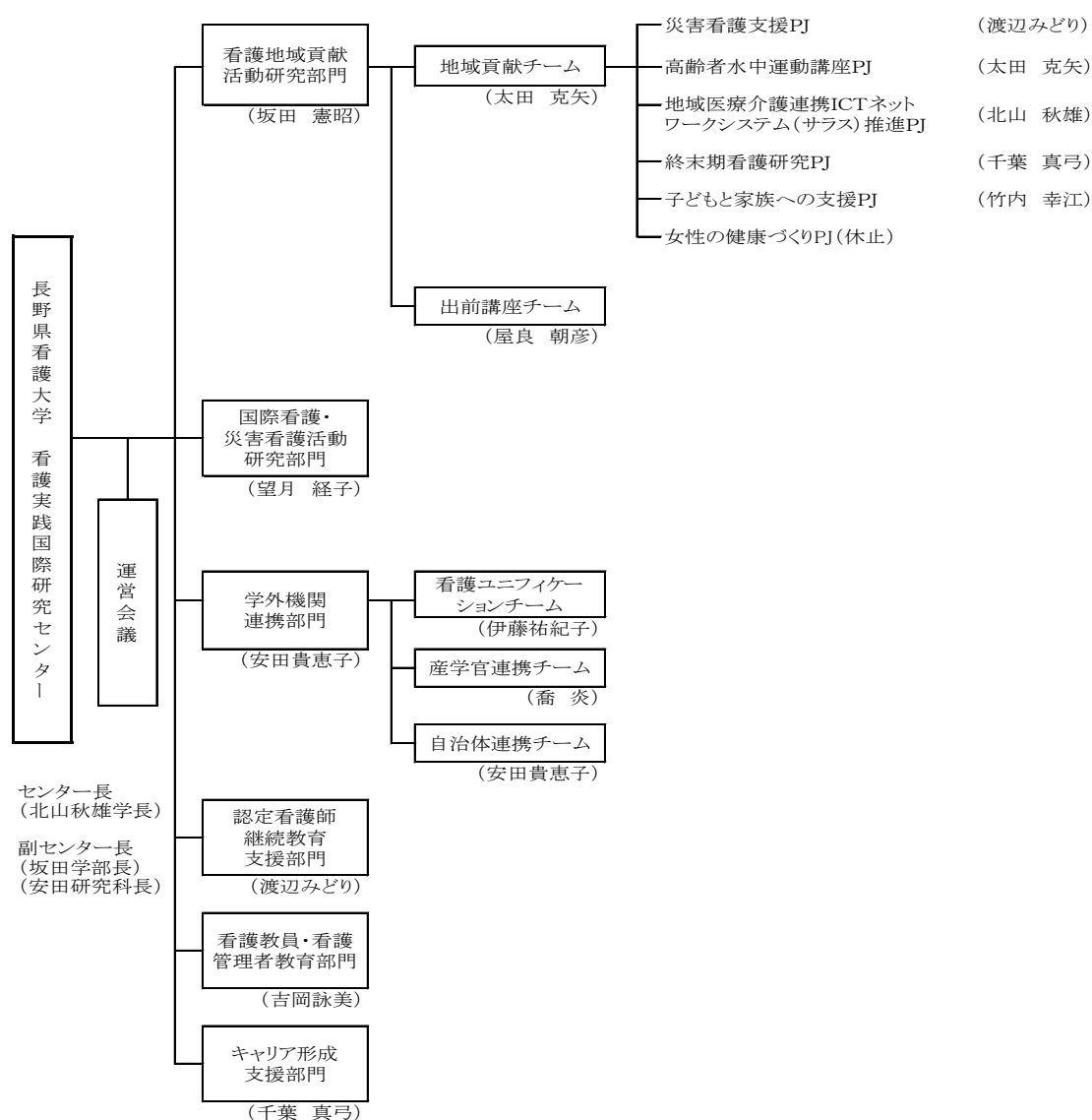
- 平成 14 年（2002 年）2 月～3 月
 - ・ 看護ヒューマンアプローチセンターを創設し下記 2 部門を配置
看護カウンセリング部門
（その後、看護エンパワメント部門に名称変更）
健康づくり支援部門
 - ・ 異文化看護国際研究センターを創設
- 平成 14 年（2002 年）12 月
 - ・ 前記 2 センターを統合し、「看護実践国際研究センター」を創設、下記 3 部門を配置
看護地域貢献研究部門
異文化看護国際研究部門
看護実践改革・学外機関交流推進部門
- 平成 15 年（2003 年）1 月
 - ・ 学外機関との共同研究の取扱いについて「長野県看護大学共同研究取扱規程」を整備
- 平成 17 年（2005 年）3 月
 - ・ 学外機関等からの受託研究の取扱いについて「長野県看護大学受託研究取扱規程」を整備
- 平成 20 年（2008 年）7 月
 - ・ 県の組織規則に「看護実践国際研究センター」の機能（設置根拠）を規定
- 平成 23 年（2011 年）4 月
 - ・ 認定看護師教育部門を配置（計 4 部門）
- 平成 23 年（2011 年）9 月
 - ・ 講座や分野を超えた学内の共同研究活動により、県及び地域の看護等の発展に寄与するため、「長野県看護大学「教員特別研究」実施要項」を整備
 - ・ 県内の職場等で働く看護職者が、自ら提案する研究テーマについて、本学の教員が共に調査・研究に取り組み、地域の看護等の発展に寄与するため、「長野県看護大学「県内看護職者との共同研究」実施要項」を一部改正
- 平成 24 年（2012 年）3 月
 - ・ 卒業生・修了生キャリア形成支援部門を配置（計 5 部門）
- 平成 28 年（2016 年）3 月
 - ・ 部門の名称見直しと内容の充実を目的として「看護地域貢献活動研究部門」、「国際看護・災害看護活動研究部門」、「学外機関連携部門」、「キャリア形成支援部門」、「認定看護師教育部門」の 5 部門に再編
- 平成 31 年（2019 年）4 月
 - ・ 看護教員養成講習会や看護管理者育成への取り組みを目的として、「看護教員・看護管理者教育部門」を設置（計 6 部門）
- 令和 2 年（2020 年）3 月
 - ・ 認定看護師教育部門を終了（計 5 部門）
- 令和 3 年（2021 年）4 月
 - ・ 認定看護師継続教育支援部門を設置（計 6 部門）

第2節 組織

1 運営体制（令和3年度）

センター長	学 長 北山 秋雄
副センター長	教 授 坂田 憲昭(学部長) 教 授 安田貴恵子(研究科長)
部門責任者	看護地域貢献活動研究部門 教 授 坂田 憲昭 国際看護・災害看護活動研究部門 教 授 望月 経子 学外機関連携部門 教 授 安田貴恵子 認定看護師継続教育支援部門 教 授 渡辺みどり 看護教員・看護管理者教育部門 講 師 吉岡 詠美 キャリア形成支援部門 准教授 千葉 真弓

2 組織図（（ ）内は代表者）



第2章 看護地域貢献活動研究部門

第1節 看護地域貢献活動研究部門の概要

部門長 坂田憲昭

1 所掌事項

長野県を中心とした地域住民への、ケアの質ならびにウェルネス（最適な生活状態）の向上に繋がる実践的研究を実施し、県民の疾病予防や健康増進等に寄与する。

2 組織及び活動

看護地域貢献活動研究部門では、地域貢献チームと出前講座チームが次の活動を行なった。

1) 地域貢献チーム リーダー：太田克矢

地域貢献チームは5つのプロジェクトで構成され、本年度におけるそれぞれの活動実績の概要は次の通りである。

(1) 災害看護支援プロジェクト

本プロジェクトは、長野県内における自然災害とそれに対する地域住民の防災意識及び健康との関連に着目した調査研究や事業を通じて看護職の役割や課題を明らかにし、それにより県内における防災・危機管理と、地域住民の健康及び医療における看護のあり方を検討する。

今年度は昨年度の実績を踏まえ、新型コロナウイルス感染症に対応したトリアージと、本学避難所への移動の体験を目的とする訓練を企画した。しかしながら、本学の所在する上伊那圏域において感染警戒レベルが5に引き上げられたことから、予定されていた計画の実施は中止された。また、これまでの活動を通して、それらの実施における今後の課題や、災害看護に関する調査・研究に関する課題等も示された。

(2) 高齢者水中運動講座プロジェクト

本学周辺地域の高齢者を対象に、水中運動を通じた健康意識の向上や、本学学生及び教員との交流の場の提供も図る、地域貢献を目的としたプロジェクトである。これに加えて「骨密度測定大会」の実施や、その結果の解析などの調査研究も行なっている。

新型コロナウイルス感染症の拡大の懸念から、「高齢者水中運動講座」の実施等、主な活動は中止を余儀なくされたが、参加登録をされている方々と本学学生との交流会を、オンライン形式あるいは学内における対面式で複数回実施した。これにより、参加した学生は「高齢者の健康探求行動」の意義や「健康行動を継続するための要素」等、高齢者の方から種々のことを学び、これからの看護を考えていく上での貴重な機会となった。また、今後の実施について、新型コロナウイルス感染症の流行下での取り組み方や地域貢献事業としての位置付け等、より長期的な課題についても確認された。

(3) 地域医療介護連携 ICT ネットワークシステム（サラス）推進プロジェクト

本プロジェクトでは、県立阿南病院や中国揚州大学看護学院等と協働／共同し、サラスと連動した、特に最先端の認知症の予防・早期発見システムの開発（早期発見の可視化）を目標とする。

(4) 終末期看護研究プロジェクト

最期までその人らしい人生を全うできるよう、看護の立場から支えることを目的とし、死を迎える人やその家族や友人、看護職者・介護職者を対象とした研究に取り組んでいる。

今年度は、在宅において独居高齢者の看取りを可能とするための活動として、住民の「互助」の実現を目指し活動している NPO 法人から情報の収集を行い、学会で発表を行った。今後については、終末期療養者への訪問看護師と訪問介護従事者の連携・協働による支援モデルの開発に向けた調査により、終末期支援への連携に向けての実践内容を明らかにしていくことが課題として示された。

(5) 子どもと家族への支援プロジェクト

本プロジェクトでは、健康問題を抱える子どもとその家族への支援について考えることを目的とする。

例年実施されている「アレルギーをもつ子どもの親の会」と「南信里親里子交流支援の会」については、昨年度と同様に新型コロナウイルス感染症の感染拡大によっていつもの活動は制限されたものの、定例会の開催と個別相談の実施に加え、研究活動の成果として学会での発表も成された。そのほかに、ホームページの充実や関連施設への視察等も実施した。また、新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴う今後の活動の維持や、更なる活性化についても課題として確認された。

2) 出前講座チーム リーダー：屋良朝彦

本学教員が各々の専門性を活かした講座を学外で実施することで、県民の要望に応えた多様な学習の機会を提供し、それにより地域に貢献することを目的とする。

新型コロナウイルス感染症の蔓延により、昨年度から講演依頼の受付を休止していたが、今年度は感染対策に配慮した上でのオンライン式や対面式等による講座の募集を再開し複数回の講演を実施した。今後については、本学出前講座制度の運営と広報の円滑化や、講座の提供の仕方等について検討すべき課題が示された。

第2節 活動実績

1 地域貢献チーム

1 災害看護支援プロジェクト

リーダー：渡辺みどり

メンバー：安田貴恵子 望月経子 千葉真弓 曾根千賀子 有賀智也 伊藤佑季

1 概要

本プロジェクトは、長野県内の防災・危機管理と住民の健康、医療における看護のあり方を検討することを目的とする。具体的には、長野県内で想定される自然災害と住民の防災意識健康との関連に着目した調査研究や事業を行い、看護職の役割や課題を明らかにする。

2 活動実績

長野県看護大学グラウンドは、駒ヶ根市指定避難所になっている。元年より災害への備えとして、地域（町4区第4町内および上穂第5町内3）と合同で避難訓練を実施してきた。令和3年度は、令和2年度の実績を踏まえ、新型コロナウイルス感染症対応のトリアージと体育館・教育研究棟までの移動を体験することを目的に訓練が企画され災害看護支援プロジェクトも参加支援することとなった。7月15日には、地域役員との話し合に参加した地域からは、「昨年の防災訓練は的を得たものであったが、反省会がなかったのは残念だった」「市の広報なども利用し、もっと多くの人に参加してもらいたい。」「大学に引き続き素案を考えてほしい」などの意見が出された。

コロナ感染症を考慮した避難所開設訓練計画（防災委員会企画）

日時：2021年8月29日（日）9：00～11：00 小雨決行

会場：長野県看護大学 体育館、学生ホール

対象：町4区第4町内および上穂町第5町内役員

方法：指定避難所となっている本学体育館にて、自治会役員を対象とした新型コロナウイルス感染症対応の避難所開設訓練を行う

内容：① 「避難所開設マニュアル」を用いて体育館に避難所スペースの設営を行う。

2m間隔にあけた災害用テントの設置、段ボールベッドの配置、

② 体育館受付の準備と避難者対応シミュレーション

教育研究等入り口で発熱者、濃厚接触者を分け、体育館に来た問題のない避難者の対応を行う。駒ヶ根市の要請を受け避難所開設の指示があったこととする。

・学生ホールを教育研究等の入り口富田楯、トリアージを行う

・トリアージにより体育館に来た避難者に対し受付が対応する

・設営した避難所スペースに避難者は入ってもらう

周知方法：8月初旬 2町内全戸を対象とした本企画への案内状の回覧

感染レベルが5に引き上げられ、上記計画実施の可否について、8月23日に地域役員とともに検討した結果、中止を決定した。

3 今後の課題

- ・防災訓練については、「何度か同じものを体験しないと身につかない」、「その都度別の訓練を行うのではなく、何度か同じ訓練をしてほしい」などの意見が出されている。コロナ感染症を考慮し避難所開設訓練にPJからメンバーを継続して派遣していく必要がある。
- ・R4年度は活動を休止するが、今後は県内に起こり得る災害について、災害看護に関する調査・研究課題を検討していく必要がある。

2 高齢者水中運動講座プロジェクト

リーダー：太田克矢

メンバー：【学内】細田江美 松本淳子 曾根千賀子 屋良朝彦 青木駿介 有賀智也
座馬耕一郎 井村俊義 近藤恵子 上條こずえ 田中真木 那須淳子
御子柴裕子 酒井久美子 下村聡子 村井ふみ 富田美雪 江頭有夏
千葉真弓 横山仁美 渡辺みどり 三浦大志 小口翔平 上條明生

【名誉教授】那須裕

【学外】野口利香（運動指導士）春日由美子 湯沢まゆみ

1 概要

地域高齢者と学生との交流の場をもち、水中運動を通して地域高齢者の健康意識の向上に繋げることを目的とした本学の高齢者水中運動プロジェクト（地域貢献チーム）は、1999年12月に発足し、駒ヶ根市とこの周辺地域に生活する高齢者を対象に20年余にわたり継続している（参加登録者数は約90名/年）。主な活動内容は「高齢者水中運動」「実習学生との交流会」「体力測定大会」である。2020度に引き続き新型コロナウイルスによる感染拡大の状況をみながら再開の検討を行ったが、「高齢者水中運動」「体力測定大会」の開催は断念せざるを得なかった。しかし、年度後半、「実習学生との交流」であれば方法を工夫して行えるのではないかと検討を重ね開催することができた。以下、その活動について報告する。

2 活動実績

【実習学生との交流】

この活動は、例年、本学の老年看護学分野の領域実習の学修目標の一つである「地域で暮らす高齢者への看護の理解」のために水中運動の開催に合わせて実習学生が参加し学修しているものである。やや感染状況が落ち着いてきた後学期に、参加登録をされている高齢者でご了承をくださった方々との交流する機会を水中運動とは別に設けて開催することができた。

具体的には、1回の交流会につき学生57名、高齢者3名と小規模の人数で構成し、後学期の実習期間中、5回の交流会を開催した。前半の2回は感染予防に重点を置き、かつ高齢者のご承諾を頂いたうえで、大学と高齢者のご自宅をオンラインで繋ぎ、また後半の3回は感染予防対策を徹底し学内に会場を設営し高齢者と学生との対面にて行った。

オンラインを用いた交流会では、画面越しではあったが高齢者の実際の暮らしぶりが見てとれ、水中運動では見るできない一面を伺い知ることができた。また、対面での交流会でも、趣味で作成したものや、日常生活での工夫の実際などもご紹介いただきつつ、今までの生き立ち、生きがいなどを伺い、さらに学生の夢や人生へのアドバイスなどもいただくなど和やかな時間を持つことができた。

学生のレポートからは、高齢者の健康探求行動は、自分の望むライフスタイルや生きがい、楽しみを長く続けていくために大切であり、加齢による機能低下や持病があっても「今をよりよく生きる」ための手段の一つとして捉えることができていた。さらに、それは第三者から強要されるものではなく、自らの健康行動をコントロールしその行動さえも「楽しみ」に置き換えることが健康行動を継続するための重要な要素であることが学びとして得られていた。また、参加して頂いた高齢者の方々は表情も振る舞いも生き生きとされており、逆に私たち自身の生活を見直す必要性や、若い今だからこそやるべきこと、誰に対しても笑顔で関わることの大切さなど、多くのことを人生の先輩の話から実感を持って得られたとの感想も聞かれた。

参加して下さった高齢者の方々からは、学生の皆さんからエネルギーをもらった。また、私たちの生き方や今思うことを、これからの看護を担っていかれる若い方々に伝えることができうれしかった。このような状況ではあるが、できない中でも今できる事を探し、夢をもってチャレンジしてほしいとの感想を頂いた。

今回の交流会では、参加人数や開催時間などに制限はあったが、参加して下さったお一人お一人の長い人生の経験から紡ぎだされた「その人らしさ」と健康に対する考え方をより深く理解することができ、学生がこれからの看護を考えていく上での貴重な機会となったと考えられる。

コロナ禍にもかかわらず、快く学生との交流会に参加して下さいました皆様には深く感謝を申し上げます。



3 今後の課題

喫緊の課題：本プロジェクトが新型コロナウイルス感染症の影響によって休止を余儀なくされてから2年近くが経過し、再開を待ち望む声がある。一方、参加登録をされている方々の体調やライフスタイルの変化などが生じている。また、水中運動講座の開催（実施）には運営スタッフの人数の確保が必要だが、大学側のプロジェクトメンバーも開催日に合わせた時間の確保が難しくなっている。これらの変化と、感染対策を講じながら今後どのようにプロジェクトを運営していくかが課題となっている。

長期的な課題：コロナ禍の状況を脱した後、以前からの課題を検討していく必要が考えられる。講座は地域貢献事業として展開し大学から地域への貢献に大きく寄与しているものの、学内行事の増加に伴い運営スタッフの日程の確保が難しくなっている。これとともに、運営の主軸となるスタッフの育成も課題となっている。この結果、事業データを既存資料として利用する研究の推進に遅れが出ている。大学が展開する重要な地域貢献事業としての位置付けを学内に周知し他の業務とのバランスを配慮していく必要がある。

4 終末期看護研究プロジェクト

リーダー：千葉真弓

メンバー：渡辺みどり 柄澤邦江 細田江美 曾根千賀子 江頭有夏 有賀智也 伊藤佑季

1 概要

最期までその人らしい人生を全うできるよう看護の立場から支えることを目的に、死を迎える人やその家族や友人、看護職者・介護職者を対象とした研究に取り組んでいる。これまで、高齢者施設に入居する高齢者への終末期ケアを中心に、意思を尊重した看護方法や施設での看取りのための看護実践内容を明らかにしてきた。また、要介護状態となった際の、介護や生活に対する高齢者の事前意思を明らかにする研究、施設入所する認知症高齢者へのなじみの場づくりのための看護実践を明らかにする研究、認知症高齢者を介護する家族の日常生活での心配や困りごとについての相談事例を分析する研究活動などを実施してきた。

2 活動実績

A市NPO法人への情報収集に基づいた調査内容を学会発表

在宅において独居高齢者の看取りを可能とするための活動としてA市において住民の「互助」の実現を目指して活動しているNPO法人（以下、B法人とする）の理事2名から情報収集を行った。B法人は、高齢者の移動や生活支援の問題を住民主体の支えあいにより解決するために、有償ボランティアによる生活支援（一部A市の総合事業）および福祉運送を行っていた。活動の担い手は50～70歳代のA市に在住する住民14名であった。サービス対象は介護保険サービスを受けていない住民であった。このNPO法人の活動の詳細に対する聞き取り調査を行い、2事例に対する支援活動を語ってもらった。

一人暮らしの高齢者2事例に対する支援活動であり、通院・買い物の付き添い・ごみの

分別など、一人暮らしの生活を維持するための支援が行われていた。また、本人の状況によっては、A市や社会福祉協議会のサービスを利用した方が良い事例もあるため、本人の希望も聞きながら迅速に必要な支援が受けられるように連携していた。こういった住民主体の支え合いによる独居高齢者への日常生活支援は、住民同士の関係性が築かれるだけでなく、定期受診や生活が整うことにより要介護状態の予防にもつながること、「最期まで家にいたい」という希望を叶えるための地域の基盤づくりにもつながることが考えられた。

上記内容は、第40回長野県看護研究学会 2021年10月2日（土）駒ヶ根市 Web開催においてポスター発表を行った。

3 今後の課題

終末期療養者への訪問看護師と訪問介護従事者の連携・協働による支援モデルの開発に向けた調査を実施し終末期支援への連携に向けて重要な実践内容を明らかにしていく。

5 子どもと家族への支援プロジェクト

リーダー：竹内幸江

メンバー：秋山 剛 足立美紀 高橋百合子 白井 史 小原綾香 安田貴恵子
御子柴裕子 柄澤邦江 下村聡子 酒井久美子 村井ふみ 富田美雪

1 概要

このプロジェクトは、健康問題を抱える子どもとその家族への支援を考えることを目的としている。例年の活動内容は以下の2つである。

- 1) アレルギーをもつ子どもの親の会：アレルギー疾患の子どもをもつ親への支援として自助サークルにかかわり、情報交換、学習会を行なう。月1回の交流会、および年1回の地域に向けた講演会・相談会を開催する。
- 2) 南信里親里子交流支援の会：長期的視点から家庭内養育を通して子どもの虐待防止に寄与することを目途して、里親同士の交流を通じた支援を検討する。月1回の交流会にかかわり、情報交換、事例検討等を行なう。

令和3年度は、昨年度から引き続き新型コロナウイルス感染症の影響で、例年の活動ができず、感染状況をみながらの活動となった。

2 活動実績

- 1) アレルギーをもつ子どもの親の会

本年度は新型コロナウイルス感染症の感染警戒レベルに合わせて定例会を開催し、講演会は延期とした。電話・メール相談は随時行った。

(1) 定例会

	月日	内容
第1回	4月8日(月)	今年度の活動方針
第2回	6月21日(月)	近況報告 座談会
第3回	7月19日(月)	近況報告 座談会
第4回	10月18日(月)	近況報告 座談会
第5回	11月15日(月)	近況報告 座談会

(2) 個別相談

ホームページを開設し、メールおよび電話による個別相談を行っている。

本年度の相談件数は、以下の通りであった。

電話相談：1件（アトピー性皮膚炎の症状、受診について）

メール相談、問い合わせ：2件（定例会開催時期）

(3) 専門情報や講演会、研修会の情報提供

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、専門機関のホームページやWEB会議サービスやオンデマンドによる講演会、研修会等が充実してきたため、それらの案内を行った。また、定例会が定期的に行われにくいため、情報交換用に会員用のメーリングリストを作成した。

(4) 講演会

講演会は3月に開催を企画していた。講師への依頼等開催に向けた準備を行っていたが、開催告知のチラシを配布する段階で新型コロナウイルス感染者数の急増があり、対面および配信での開催を検討していたが、開催方法、新型コロナウイルス感染症への対策を鑑み、次年度へと延期した。

(5) ホームページの充実

随時更新し、有益な情報のある専門サイトへの紹介等おこなった。また、長野県小児保健研究会のホームページとのリンクがなされた。

(6) 長野県看護研究学会でのポスター発表（WEB配信：R3. 10/2～30）

アレルギーを持つ子どもの親の会「たんぼぼの会」の現状と課題と題して、WEB上でポスター発表を行った。

P-27 アレルギーをもつ子どもの親の会 「たんぼの会」の現状と課題

長野看護大学 発達看護学講座 小児看護学分野
足立美紀 白井史 高橋百合子 竹内幸江 小原綾香

はじめに

平成9年に駒ヶ野町のアレルギーをもつ子どもの母親たちと、保健師、小児科看護師、発着者といった支援者と共び「たんぼの会」(以下、本会とする。)の活動が始まった。はじめは支援者中心であった会も、数年で親主導の会に移行し、会員同士の活発な交流や活動が行われてきた。

家族会は、地域の同じ悩みを抱える有識者の連絡の交流の場であり、学び合い、共有し合う場として有効である。しかし、以前と比べ、昨今のICTの発展に伴い、SNSを活用し情報収集や地域を越えた情報づりができるようになり、学識者の専門家が必ずしも情報を得やすくはなっていない。また、新型コロナウイルス感染症の蔓延等により、他者との交流の機会も制限されている中では、親の会の活動の仕方の変更が求められている。本会の場合、会員や支援者の世代交代が進む中、参加者が減少し、活動の停滞も懸念されている。以上から、本会のこれまでの活動を振り返り、今後の会のあり方や活動方法等の検討を行ったため報告する。

ねらい

情報を求める親が会へ連絡を取りやすく、かつ必要な情報につながるができるように正しい情報を発信していく活動を維持していくこと、また、活動の制約がある中、仲間づくりや同世代との交流を維持できるように活動を検討する。

「たんぼの会」の活動の現状と課題

2010年代前半までは10年度程度が参加し活動していたが、2010年代後半から参加者が減少し、年1回の講演会は継続しているが、月1回の定例会は本会が中心となり、活発な活動と見えなくなっている。本会の現状と課題は以下の通りである。

1. 電話相談・メール相談の増加とホームページ(以下HP)とする掲載内容の不足
これまで近隣市町村の保健センター、子育て支援センター等に向けチラシや会報の送付を行っていたが、会への参加者は20〜40代の母親らであり、SNS等による認知は、その世代に向けた情報の公開に偏していると考えられ、2011年度からはホームページを開設し、保健センターの本会の活動を示してきた。これでも近隣市町村からアトピー性皮膚炎や食物アレルギーで悩む母親へ本会を告知した点も多かったが、ホームページの開設以降、HPを見たという電話相談、メールでの問い合わせが増えていく。HPへの掲載内容は、定例会の日程、過去の講演会等の内容であり、アレルギーに関する情報を求める親に対しては内容は不十分であり、検討が必要である。
2. 会員数の減少と活動内容の停滞
本会の会員はアトピー性皮膚炎と食物アレルギーをもつ子どもの親が多く、参加者の傾向として、産後を期した乳児から就学前までの母親であることが多い。そのため、定例会は平日の午後に開催されることが多く、就学や除去食療法にあたり本会を退会する方が多い。見守りとして定例会に一度参加した新規参加者も継続して参加しづらく、会員数は減少傾向にある。現在は初期からのメンバーも会員期間が5年以上の者が多く消えている。参加者間での交流を促すも、世代の違いや悩みの異なるためアトピー性皮膚炎なのか、食物アレルギーなのかに違いを感じ、新規参加者も参加継続に繋がらない場合も増えている。また、参加者の減少に伴い、定例会は定例開催ではなくて茶話会である。茶話会を兼ね、各自の悩みを共有する。相談できる場を持つのは、本会の目的として一貫するところである。しかし、毎回定例開催では物足りなく感じる参加者も出てくる。新規参加者が継続して参加しづらく、活動内容が停滞している。定例会への新規参加者が減少する一方で、講演会には定例会とは母親が現存も参加し、本会の動向を気にかけている様子が見える。そういった退会後の会員とのつながりも大切にすることを必要とする。
3. 親主導の会の維持の難しさ
上記と関連し、会員期間が長い方は会の「代表」という役割を担うこともあり、その負担感から退会する会員もいる。各宗報も会員が主体となって企画を考え、実施することが多くなっており、発表者らはその時々状況に応じ、一緒に取り組むという姿勢で支援を行ってきた。しかし、会員同士の話し合いの場、発表者らの支援者主導での活動を期待されていると感じることが増えてきた。支援の中心となって関わっていた教員の退任もあり、支援者側の本会の運営に対する関心も減らしてきている。両者である会員が主体で会を維持しつつも、運営の負担を感じさせない支援が求められている。

「たんぼの会」の発足の経緯とこれまでの活動

本会は、1997(平成9)年に駒ヶ野町の1Fにアレルギー対応のニーズを挙げて、1F1層の経営者とその知人を中心に、小児科看護師、保健師、栄養士、発着者らの小児看護学分野の教員3名が中心となり、同年6月に「アトピーの会」を設立し準備委員会が支援者のみで構成された。アトピー性皮膚炎の子どもの親のニーズが高いこと、親のニーズに応えるべく支援が必要と必要を得て設立された。設立当初に参加者を募集したところ、約30名様の母親が参加を希望し、本会はスタートした。最初の頃は、地域の公民館の一室を借用し実施していたが、大平棟内の一室を活動に使用することで職員を中心に学識者や親生も参加し交流する場となった。

月1回の定例会は保健師・人職員の補助を受けての参加が多く、近隣市町村以外も、アトピー性皮膚炎に対するアンケート方法や食物アレルギーに対する食事療法、アレルギー検査等についての勉強会、レシピ交換や調理実演、食物アレルギーへの対応食品や外食できるお店の情報交換、アレルギー対応食品を製造している会社からの試食依頼、市町村保健師や栄養士、小児科医を囲んでの相談会といったものから、フットケアや子どものためのツボマッソーという講演会、各自会員が作った持ち寄りデザート、子どもを連れての外出の会など多岐にわたる。また、近隣市町村が主催しているアトピー性皮膚炎の親の会との交流も年1回行われていた。

設立当初、準備委員会が作成されていたが、2001(平成13)年度から年1回、活動の振り返りとして会報を作成している。更に1期には会員が作成するが、印刷や紙本等は発着者も手配している。できあがった冊子は、近隣市町村の保健センター、子育て支援センター等を中心に配付し、本会の活動を広く知らせている。

会員より期待・地域のニーズへの情報提供と話し合いの場をもつことを目的とし、発足後2年目から年1回の講演会を本会と発着者との共同開催で位置づけで開催している。開催には、長野県看護大学教員特別研究員による研究活動(2016(平成28)年から)は毎年度地域保健活動研究部門のプロジェクトの1つとして活動の一部として助成金を活用し、専門的知識の発信として医師、栄養士といった専門職との連携や相談会といった形で行われている。



図1 2010年度講演会
図2 2011年度定例会の様子
図3 2014年度の講演会と、結成10周年記念の茶話会
図4 2014年度の茶話会
図5 2015年度定例会の様子

考 察

発着者が2014(平成26)年に行った調査で、保健所に食物アレルギーをもつ子どもを連れてくる親が親の会へ来ることを尋ねたところ、「情報発信」「同じ立場の親との交流」「情報交換の場を確保」「除去食療法に関する悩みを共有したい」「料理教室の開催」「アレルギーを克服したい」といったニーズが挙げられている。それと対応に開催している。最近の本会の活動は、参加対象者のニーズを汲み取った活動になっていなかったことは明らかである。会員数が減少してきた時期を振り返ると、定例会が近隣市町村を中心とした茶話会のみになっていた時期でもあり、参加者にとって魅力ある会にしたいためには、参加者の得意な情報にアクセスできること、参加したと実感する活動内容の充実が必要である。HPでは、これまでの定例会「話したくない内容を聞き取り、正しい情報と発信していくこと、専門的なサイトやリンクづけること」も必要である。また、交流の制約がある中で発信者と閲覧者の双方のやりとりができるようなOTやSNS等を活用した交流も検討していく必要がある。定例会でも、テーマを決めた相談会や専門職を招いての勉強会や相談会といった企画を定期的に取り入れていく。継続した参加ができる企画運営が必要である。また、講演会には以前にも会員と検討したが、その時点での会員の都合や施設利用の確保も取り入れた経緯がある。再度、就いている家族も参加しやすいよう、開催日時や場所等を考え、支援を検討していく必要がある。

しかし、この案は発着者や支援者が中心となり考えていることである。親主導の会を維持することは、現状の会員数では困難が伴っている。会員同士で今必要な支援とは何かを話し合い、各自が会の運営に参加しているという状況につながる役割分担を再度検討する必要がある。また、参加者はある時期になったら退会していくという前提で、世代交代が円滑に進むよう支援が必要である。電話相談のメールでの対応は、様々な時期にある相談者のニーズへの対応が求められる。そのため、小児科看護師や小児アレルギーエデュケーターといった専門職とのつながりや地域の家族会との関係を築いていくことが重要である。

ま と め

地域に小児のアレルギー専門医が少ないこと、相談が一定数あることから本会の活動には意義がある。情報を求めて問い合わせをする親は、子どもが幼かったり、発症初期であったり、医療費や周囲の人の対応に納得できず、不信感や焦り、心配といった感情に溢れていることが多い。子どもが家族がすこやかに過ごせるよう、地域に根ざした支援活動を今後も継続していきたい。

2) 南信里親里子交流支援の会

従前より、原則毎月第3月曜に定例会を開催してきた。本年度は新型コロナウイルスの流行状況・感染対策に考慮しながら対面での活動を維持した。なお、来年度から遠隔での開催も行えるように準備を進めている。

	月日	内容
第1回	4月8日(月)	今年度の活動方針
第2回	6月21日(月)	近況報告 座談会
第3回	7月19日(月)	近況報告 座談会
第4回	10月18日(月)	近況報告 座談会
第5回	11月15日(月)	近況報告 座談会

(2) 関連施設への視察

会員2名で10月31日(日)にNPO「子ども・若者 Step ハウス」(岡谷市)を視察した。このハウスは、元里親とその関係者により設立され、不登校、引きこもりの児童や若者に居場所を提供することを主な目的としている。ここでは、保護者、児童への相談支援のほか、スポーツや農業体験の提供を行っている。代表者と、今後、本会との協力体制を構築することを確認した。

3 今後の課題

交流会、自助グループにかかわりながら、さらに会員のニーズを把握し、支援方法を検討していく。そして、新型コロナウイルスの流行状況を考慮しながら、いかに活動を維持、活発化していくか引き続き検討する。また、会員数の確保のため、それぞれの活動内容を地域に発信し、理解を求めることも必要である。

リーダー：屋良朝彦

メンバー：三浦大志（副リーダー） 坂田憲昭 浦野理香 有賀智也 上條こずえ
高柳実希 足立美紀 酒井久美子 米久保篤（事務局長）

1 概要

長野県民の要望に応え、本学の教員が各々の専門性を活かした講座を学外で実施することにより、学習機会を提供し、地域に貢献することを目的とした講座制度に関わるシステムの運営と広報を担当している。具体的には、講座内容の取りまとめと広報、依頼の把握、問題発生時のサポート、主催者向けアンケートの作成と集計、システムの再検討などである。

講座の開催に関する流れとしては、主に、パンフレットの配布、各団体からの申し込み、主催者と講師との調整、講座開催、主催者アンケートの回収、講師の実施報告で構成される。

2 活動実績

平成 28 年度にチームの活動を開始し、平成 29 年 10 月より、学外での講座の開催を開始した。平成 30 年度の出前講座の登録演題数は 49 題であり、9 件の講座を開催した。令和元年の出前講座の登録演題数は 50 題であり、9 件の講座を開催した。令和 2 年度は新型コロナウイルス感染症の状況に鑑み、募集を中止した。令和 3 年度から、コロナ対策を十分に配慮したうえでオンライン、対面、ハイブリッドでの講座の募集を再開した。開設講座は 48 件、担当講師は 32 名、実施件数は 5 件である。

以下、概要。

(1) 題名：他者への関心 ～それが看護の原点～ 講師：伊藤祐紀子

開催日時：令和 3 年 9 月 16 日（木） 13：45—14：50、15：05—16：10

開催場所：長野東高校（オンライン） 参加者：31 名

(2) 題名：命の大切さ 講師：竹内幸江

開催日時：令和 3 年 11 月 11 日（木） 9：30—10：00

開催場所：桜ヶ丘保育園 ホール（対面） 参加者：園児 24 名、大人 5 名

(3) 題名：他者への関心 ～それが看護への原点～ 講師：伊藤祐紀子

開催日時：令和 3 年 12 月 9 日（木） 14：35—16：25

開催場所：松本蟻ヶ崎高校（対面） 参加者：31 名

(4) 題名：在宅での見取りを考える 講師：柄澤邦江

開催日時：令和 4 年 1 月 14 日（金） 10：00—11：30

開催場所：宮田村公民館（オンライン） 参加者：10 名

(5) 題名：他者への関心～それが看護の原点 講師：伊藤祐紀子 教授

日程：3 月 7 日（月） 10：00—11：50（予定）

主催団体：中野西高等学校（オンライン） 受講者：医療職志望の 1・2 年生の生徒約 60 名

3 今後の課題

新型コロナウイルス感染症の流行状況を見ながら、対面方式・リモート方式の両面から活動を継続させていく。そのためにも、出前講座制度の運営と広報を円滑に行うことが重要である。加えて、主催者、講師ともに、より活動しやすくなるよう、改善しながら活動していくことが求められる。より幅広い受講者層に講座を提供できるよう検討を行なうことを視野に入れる必要がある。

第3章 国際看護・災害看護活動研究部門（IRC）

第1節 国際看護・災害看護活動研究部門（IRC）の概要

部門長：望月経子

メンバー：喬炎 渡辺みどり 安田貴恵子 屋良朝彦 井村俊義 秋山剛 河内浩美
座馬耕一郎 御子柴裕子 柄澤邦江 中畑千賀子 近藤恵子 高橋百合子
下村聡子 田中真木 村井ふみ 飯嶋勇貴 福嶋洋子

1 概要

長野県看護大学は、1995年の開学以来、教育研究目標のひとつとして、国際的な視野を持って教育研究活動し国内外の看護学の発展に寄与できる人材育成を掲げてきた。そうした背景から2002年3月、International Research Center in Cross-Cultural Nursing (IRC) は、本学の多文化・国際看護と健康に関する教育研究を支援する拠点として設立された。2002年12月には、看護実践国際研究センターの設立を機に「異文化看護国際研究部門」に、2016年から災害看護を加えて「国際看護・災害看護活動研究部門」(International Research Center in Cross-Cultural and Disaster Nursing)に組織替え・名称変更を行い、活動内容の拡充を図ってきた。

2 活動実績

昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染症の国際的な蔓延によって、USF/SMU 交流プロジェクトにおける看護海外研修およびカンボジア交流プロジェクトの国際看護実習が3年越しで中止となった。国際交流活動の制限はしばらく続くと予想されるが、ネパール交流プロジェクトはオンラインシステムなどを活用して、研修会を継続し実績を上げた。また、国際看護実習は、カンボジアへの渡航は本年度も見送られたものの、昨年同様に実習先を駒ヶ根市に移し、JICA 駒ヶ根訓練所およびJOCA（公益社団法人青年海外協力隊）の多大なる協力の下、高崎健康福祉大学と連携し実習を展開した。本来ならばここ駒ヶ根に全員集合し実習を開催予定であったが、感染警戒レベルが5となり蔓延防止措置が取られたために、急遽オンライン開催となった。

このような状況ではあるが、今年度も”Challenge to Change”（変革への挑戦）をスローガンに掲げた本年度の活動を報告する。

3 今後の課題

新型コロナウイルス感染症の世界的な蔓延はしばらく続くであろうし、国際交流活動の制限も同様であると予想される。このような時には遠隔システムなどを活用した積極的な交流を、また、海外に自由に渡航できるようになっても、遠隔システムを交えた新たな交流の形も見えてきたのではないか。本学の開学以来の教育目標のひとつとして、「国内外の教育研究機関との共同研究や看護実践活動をとおしてグローバルな視野を持った人材を育成し看護学全体の発展に寄与すること」を掲げており、IRC を中心とした、より一層の教育研究の推進とともに、その活動の広報と成果の発信、また交流や研修のみならず各プロジ

ェクトにおいてはテーマ毎に共同での研究の推進が課題となっている。

第2節 活動実績

1 USF/SMU学術交流プロジェクト

リーダー：安田貴恵子

メンバー：田中真木 渡辺みどり 秋山剛 村井ふみ

1 概要

2003年より、アメリカ合衆国のカリフォルニア大学サンフランシスコ校（UCSF）、サンフランシスコ大学（USF）看護学部、サミュエルメリット大学（SMU）看護学部と学術交流を重ね、大学院前期課程の共通選択科目の実施にもかかわっている。

2 活動実績

新型コロナウイルス感染症の蔓延により、学術交流は途絶えている。現状では、コロナ禍での学部教育ならびに大学院教育の対応に追われているために、国外の大学との学術交流のための時間の確保が課題となっている。

大学院前期課程科目「看護海外研修」は、海外渡航が困難であること、オンラインでの交流は米国西海外と日本の時差を考慮すると、開催時間の調整が困難であることから、上記の大学との交流を通じた「看護海外研修」の内容を変更してプログラムを検討した。具体的には、ネパール国ポカラレクナート市の母子友好病院と駒ヶ根市ネパール交流市民の会の活動を中心とした研修プログラムである。具体化までこぎつけたが、新型コロナウイルス感染症の流行時期と重なったため、履修を希望する学生（社会人）の方が、履修のための時間確保が困難な状況となってしまった。そのため、「看護海外研修」の実施を延期するという対処をとった。

3 今後の課題

新型コロナウイルス感染症は収束する見通しは示されていない。むしろ、新型コロナウイルス感染症とともに活動をしていくことが続くと考えられる。このような状況において、サンフランシスコ大学（USF）看護学部ならびにサミュエルメリット大学（SMU）との学術交流をどのようにしていくか検討が必要と考える。

2 サモア国立大学との学生間交流事業

リーダー：望月経子

メンバー：飯嶋勇貴

2018年度よりサモア国立大学との学生間交流事業は終了した。また、新型コロナウイルスの世界的な流行とともに本プロジェクトの2021年度は活動も休止となった。

本学における学生間交流は終了となったが、教職員間の学術交流は継続していく事となっており、14年間におけるサモア国と本学の交流を基礎に、今後も積極的に交流が進められるよう期待する。

3 中国医科大学/揚州大学学術交流PJ

リーダー：喬 炎

メンバー：北山秋雄 屋良朝彦 柄澤邦江 近藤恵子

【2021年度の活動】

1. 揚州大学大学院生と学部生の本学での短期留学はコロナ感染症の流行で中止.
2. 揚州大学看護学院からの研究生（3名）の研究をネットで指導継続
3. 成果(論文発表)
 - 1) Huiwen Xu, Yanwei Wang, En Takashi, Akio Kamiyo, Daiji Miura, Kunie Karasawa, Akio Kitayama, Jian Lu, Lan Zhang (2021): Predicting the different progressions of early pressure injury by ultraviolet photography in rat models. International Wound Journal, 1-11. DOI: 10.1111/iwj.13681.
 - 2) 王艶薇, 徐慧文, 上條明生, 近藤恵子, 北山秋雄, 喬 炎 (2021): 圧力程度の差による実験的早期褥瘡の発赤と転帰への影響. 日本褥瘡学会誌, 23(4):326-332.
 - 3) Lu Chen, Yuan Yuan, En Takashi, Akio Kamiyo, Jingyan Liang, Jianglin Fan (2022): Establishing appropriate pressure of transparent disc method for distinguish early pressure injury and blanchable erythema. Diagnostics, in press.

4 カンボジア等（東南アジア地域）交流プロジェクト

リーダー：望月経子

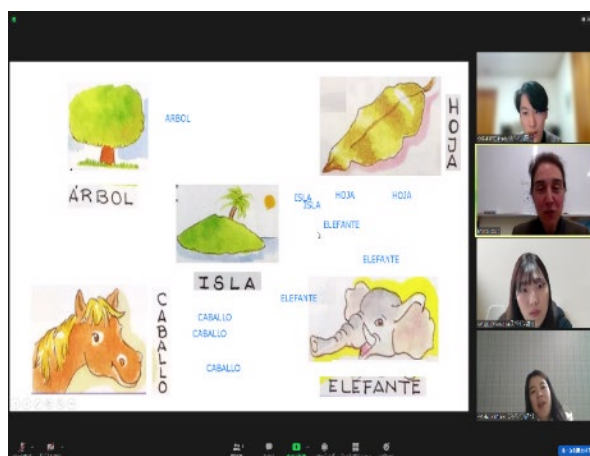
メンバー：飯嶋勇貴

1 実施状況

新型コロナウイルスの世界的蔓延によりカンボジア等交流プロジェクトの活動も休止となった。本来ならば、視察先の病院等とオンラインで結び交流が実施できればいいのだが、開発途上国のカンボジアにはオンライン環境も整っていない中、その実現は不可能であった。このような中、令和3年度の国際看護実習も令和2年度の引き続き実習先をカンボジアから駒ヶ根市に移し、高崎健康福祉大学と共同で12日間の実習を展開した。今年度は本大学から8名の履修者があり、高崎健康福祉大学からは、看護学科、薬学部、子ども教育学科、生物生産学部、医療情報学科、社会福祉学科、国際交流センターから計15名の参加があり、総勢23名での実施となった。

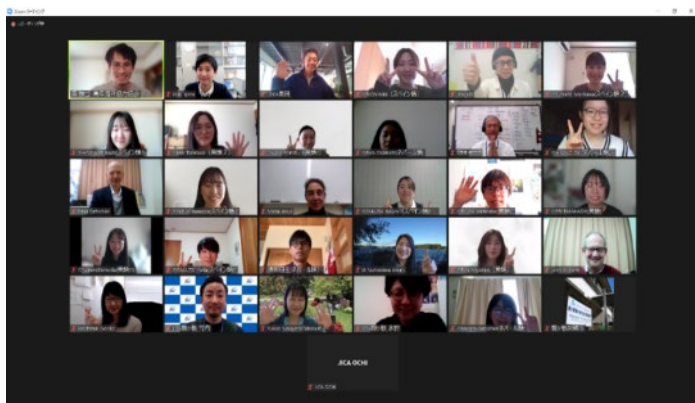
2021年度 国際看護（保健）実習		2021年2月8日（火）～3月4日（金）	
Day	Time	Contents	Method 健大（ ）
1/14（金）	PM	1. 国際看護（保健）実習の目的・目標の理解 2. 国際看護（保健）実習の全体像の把握	オリエンテーション（web）
2/9（水）	14:40～ 16:10	講義「ネパールの母子保健の概要」 講師：プロジェクト専門家 竹原 泰世	講義(web)
2/9～15		ネパールについての事前学習（概要・文化・歴史・保健水準・看護など）	GW
2/16（水）	13:00～ 16:10	ネパールについての事前学習（概要・文化・歴史・保健水準・看護など）のGW発表	発表会(web)
2/17（木）	13:00～ 14:30	講義「ポカラ市北部における住民参加型地域保健活動を軸とした持続可能な母子保健プロジェクト」プロジェクト概要 講師：北原照美プロジェクトマネージャ	講義(web)
〃	14:40～ 16:10	講義「ポカラ母子保健プロジェクト当大学のかかわりについて」 講師：河内浩美 准教授	講義(web)
2/18（金）	9：00～ 17：00	「ポカラ市北部における住民参加型地域保健活動を軸とした持続可能な母子保健プロジェクト」の病院視察、現地看護職との交流	WEBにて参画
JOCA主催 国際交流プログラム参加 ～駒ヶ根から世界を考える～			by JICA、JOCA
2/28（月）	検討中 Web2コマ	JICA ネイティブによる語学研修 （英語、スペイン語、ネパール語、シンハラ語）	JICA Web
3/1（火）	11：00～ 17：00	AM ・入隊式/オリエンテーション ・JICA海外協力隊について PM ・SDGsカードワークショップ ・異文化ワークショップ	JICA JOCA 駒ヶ根訓練所
3/2（水）	9：00～ 17：00	終日 協力隊シミュレーションワークショップ	JICA JOCA 駒ヶ根訓練所
3/3（木）	9：00～ 17：00	mini温泉 gastroノミー体験 参加費2500円（昼食代他）	駒ヶ根キャンプセンター 駒ヶ根高原
3/4（金）	9:00～12:00 対面2コマ	JICA ネイティブによる語学研修 （英語、スペイン語、ネパール語、シンハラ語） 解散式	JICA

実習内容は JICA・JOCA、そして本学が支援しているネパール市民の会に実習の協力を依頼し、ネパールの現地の看護師らとの交流、SDGs の理解をはじめとする国際協力、そして地域おこし活動について学べる「駒ヶ根グローバル協力隊プログラム」を実施した。具体的にはオンラインを用いてネパール草の根プロジェクトの報告会への参加や現地スタッフとの交流、そして JICA・JOCA の協力の下、語学研修（英語・スペイン語）、SDGs ワークショップや協力隊員体験プログラム、そして駒ヶ根市内の地域おこし活動の体験を実施した。本年度もカンボジアなど途上国現地の空気を肌で体感することは出来なかったが、地域から世界を考え自分たちに何ができるのかができるのか、国際看護活動はどのようなものなのかを学生自身深く考え学ぶことができた実習となった。また、本年度は高崎健康福祉大学との共同開催であり、他大学他学部の学生と一緒に学ぶ機会が持てたことは、本大学の学生にとり大きな刺激となり、また様々な価値観に触れることができていた。JICA・JOCA の多大な協力があり実習を実施することができたことに感謝するとともに、来年度以降もこの繋がりを維持し、実習だけでなく講義、または地域の貢献活動へ生かしていきたい。



2 次年度に向けた課題

現在、コロナ禍の中においても徐々に海外への渡航も開かれてきている。来年度はカンボジアで国際看護実習ができることを期待したいが、前回教員が視察してから3年が経過している中、学生が安全かつ効果的に実習を行えるために、実習前に教員が渡航し再度実習場所や宿泊場所の選定をしていく必要がある。



5 ネパール交流プロジェクト

リーダー：河内浩美

メンバー：安田貴恵子 望月経子

1 活動実績

自治体国際協力促進事業（モデル事業）第2フェーズ「上伊那地域の助産師から学ぶ分娩期のアセスメント能力強化研修 実践編」におけるオンライン研修の実施

本事業は、駒ヶ根市の国際協力友好都市であるネパール・ポカラ市の母子保健研修センターの指導者を養成し、同センターの研修機能を強化することでポカラ市全体の助産ケアレベルを向上させ、妊産婦、新生児の死亡率の改善を図ること。また、本学、交流市民の会と連携し、本学での研修、地域住民との交流を通じて、特色ある大学づくりと、地域の国際化・活性化を図ることを目的としている。

本プロジェクトでは、昨年の第1フェーズの研修を終えて明らかとなった課題の改善を目指した内容となっており、上伊那地域のおひさま助産院や菜の花マタニティクリニックの助産師らとともに実践力の修得を目指した研修を実施した。その中で、本学が主となり支援した活動について述べる。

1) 研修期間：2021年7月18日（日）～2月13日（日）全7回

2) 研修生：ポカラ市母子友好病院看護職員2名

（他希望者は聴講のみ）

3) 研修方法：オンライン

4) 研修概要

第1～3回までの研修では「実際の事例についての分娩期の初期診断および経過診断ができる」ことを目標に、研修生らが担当した事例の助産診断についてプレゼンテーションを行いアセスメントの着眼点や方向性をともにフィードバックし理解を深めた。また、日本の助産師の分娩期のアセスメントの実際について、上伊那地域の助産師らが分娩開始した産婦からの連絡への対応、来院時の対応から分娩終了までをロールプレイで演じながらアセスメントの考え方の実際をバーチャルツアーで紹介した。

このように、これまで修得してきた思考過程を研修生自身が担当した事例に基づき、日本の助産師であったら、どのようにアセスメントしケアを実践するのかをバーチャルな視覚的手段で伝えることで、これまでイメージできなかったケアの実際について理解を深めることができた。

回	日時	内容
1	7/18 (日)	①事例展開のプレゼンテーション (研修生の担当した事例) ②おひさま助産院バーチャルツアー
2	8/29 (日)	①アセスメントトレーニング (研修生の担当した事例) ②菜の花マタニティクリニックバーチャルツアー
3	9/18 (土)	①アセスメントトレーニング (研修生の担当した事例) ・分娩の3要素, 児頭の回旋など
4	11/28 (日)	①アセスメントトレーニング (ケーススタディ) ②菜の花マタニティクリニックでの分娩記録の実際 ③胎児心拍の聴取方法と評価
5	12/19 (日)	①アセスメントトレーニング (現地の異常経過をたどった事例) ②分娩期の胎児評価の実際
6	1/16 (日)	分娩の3要素評価のためのフィジカルイグザミネーションの実際
7	2/13 (日)	課題プレゼンテーション 修了式

2 今後の課題

昨年から2年を経て、分娩第1期のアセスメント能力の強化を図ってきたが、本事業の最終目標である母子保健研修センターにおいて指導ができる段階までは至っていない。引き続き、研修生らが現地で指導を担えるための支援活動が必要であると考えます。

6 ニューズレター制作

編集長：座馬耕一郎

メンバー：屋良朝彦 井村俊義 秋山剛 村井ふみ

2021年の活動をまとめたニューズレター『長野県看護大学・異文化看護ニューズレター第15号 (IRC Newsletter No. 15)』を2022年3月に発行した。

内容は、(1) 巻頭言、(2) ネパール交流支援プロジェクト (駒ヶ根市の自治体国際協力促進事業 (モデル事業) (第2フェーズ) 「上伊那地域の助産師から学ぶ分娩期のアセスメント能力強化研修 実践編」によるオンライン研修の開催)、(3) カンボジア等 (東南アジア地域) 交流プロジェクト (JICA、JOCAにおける国際看護実習)、(4) IRCメンバー紹介の計4つの記事で構成した。

記事はそれぞれ日本語と英語で表記し、プロジェクトの各担当者が作成した日本語の記事を、翻訳担当の4人が英訳した。総ページ数は8ページであり、活動を示す写真を8枚掲載した。発行部数は500部であり、国際交流をおこなう機関をはじめ、実習の受け入れ機関、大学院をもつ看護系の大学、報道機関等、国内293カ所、国外 (米国、サモア、中国、ネパール) 11カ所に送付、または手渡しによる配布を行った。

第4章 学外機関連携部門

第1節 学外機関連携部門の概要

部門長：安田貴恵子

1 所掌事項

- 1) 看護連携型ユニフィケーション事業による教育連携、相互研修、研究交流の推進。
- 2) 企業、自治体、研究機関等との共同研究・受託研究等を実施し、本学の「知の活用」を図り地域社会に貢献するための窓口として活動。
- 3) 自治体との包括的連携協定に基づく事業の推進。

2 組織及び活動

看護ユニフィケーションチーム、産学官連携チーム、自治体連携チームが活動を推進している。

1) 看護ユニフィケーションチーム リーダー：伊藤祐紀子

- ・看護研究研修会、研究指導、相互研修「ユニフィケーション研修会」
- ・教員の臨床研修、学内演習への臨床看護師の協力
- ・病院の事例検討会等への参加

2) 産学官連携チーム リーダー：喬 炎

- ・共同研究・受託研究の窓口としての活動とその後の研究の発展
- ・学内教職員向けの産学官連携研修会の開催
- ・「スマート看護・福祉研究会」での情報交換
- ・伊那谷アグリイノベーション推進機構での情報交換
- ・長野県における産学官連携団体への参加と産学官連携に関連する情報の提供

3) 自治体連携チーム リーダー：安田貴恵子

- ・駒ヶ根市ネパール交流市民の会の活動への協力
- ・駒ヶ根市民の防災活動への協力、健康づくり活動への協力

第2節 活動実績

1

看護ユニフィケーションチーム

リーダー：伊藤祐紀子

メンバー：柳原清子 千葉真弓 西村理恵 吉岡詠美 那須淳子 白井史 富田美雪 林陽子 福嶋洋子

齊藤秀樹（事務局）

1 概要

「看護連携型ユニフィケーション事業」は、平成27年度よりスタートし、令和3年度で7年目を迎える。現在、締結施設は5施設（伊那中央病院、昭和伊南総合病院 飯田市立病院、こころの医療センター駒ヶ根、伊那神経科病院）である。

令和2年度は、COVID-19の蔓延により、主要な事業の休止を余儀なくされた。令和3年度は、感染対策を取りながら可能な方法で本学と協定締結5施設が看護実践・教育・研究面において連携し、看護職者のキャリア形成を推進するとともに、看護ケアおよび看護教育の質の向上や看護共同研究を発展させることを活動方針とした。以下の3つの主要事業『教育連携』『相互研修』『研究交流』を実施した。

2 活動実績

1) 教育連携事業

(1) コロナ世代の新人看護師の現状についての情報交換

①第1回 日時:令和3年5月7日(金)16:00～17:00

方法:Zoomによるオンラインミーティング 参加者23名

概要:看臨地実習を経験することなく卒業した新人看護師の就職1か月時点の現状と各施設における対応について情報交換を行い、新人教育のあり方、大学における今年度の教育のあり方を考えた。

評価:事後アンケートの結果、開催時期、内容、時間は適切であり、「貴重な機会」「大変有意義」「開催を継続してほしい」との声が寄せられた。

②第2回 日時:令和3年12月22日(水)16:00～17:15

方法:Zoomによるオンラインミーティング 参加者46名

概要:臨地実習を経験することなく卒業した新人看護師の就職8か月時点の現状と各施設における対応について情報交換を行い、新人教育のあり方、大学における今年度の教育のあり方を考えた。

評価:事後アンケートの結果、開催時期、時間は適切であり、「次年度の準備に活用できる」、「施設からの報告や意見が参考になった」「グループワークなどで意見交換する機会があってもよかった」との声が寄せられた。



情報交換会の様子

2) 相互研究事業

(1) 教務実習委員会 FD 研修との共催企画

テーマ：臨地実習経験の乏しい学生の学びを促進する実習場面の教材化～発問・内容整理・仲間との共有など効果的な支援方法について～

日時：令和3年9月2日（木）13：30～15：30

講師：池西静江先生（Office Kyo-Shien 代表）

方法：Zoomによるオンライン研修 参加者74名（学内40名、学外34名）

評価：実施後アンケートでは、学生の学びをより深めるための実習指導方法について93%がイメージできた、今後の実習指導や看護教育に活かせそうだと思う98%と評価が高かった。

(2) 看護教員・看護管理者教育部門と共催

テーマ：初めてプリセプターになる看護者のための研修会

講師：吉岡 詠美（長野県看護大学 看護管理・教育学分野 講師）

日時：令和4年2月16日（水）13:00～16:00

方法：Zoomによるオンライン研修 参加者15施設より91名

概要：新人看護職員研修ガイドライン、プリセプターの役割・心構え、コミュニケーションスキル

評価：実施後アンケートでは、プリセプターの役割の理解ができ、研修内容が役立ちそうだとお概ね良好な評価だった。心構えや事例がわかりやすかった、指導への不安があったが、どう指導されたか思い返し、今回の学習も合わせ指導にあたりたい、以前よりイメージができてよかったなどの意見が寄せられた。

3) 研究交流事業

(1) 看護研究研修会の開催

テーマ：研究に役立つ！文献のリサーチ方法を知ろう

日時：令和3年10月1日（金）16：00～17：00

講師：清水 満里子（長野県看護大学 図書館司書）

方法：Zoomによるオンライン研修 参加者25名（協定施設より14名、学内教員11名）

概要：web上の文献検索サイトを活用して研究に必要な文献へのアクセス方法

の解説

評価：文献検索サイトの利用方法は概ね理解でき、事例報告へ活用したい、文献検討の際に文献検索サイトを活用しようと思うといった意見だった。



看護研究研修会の様子

(2) 長野県看護大学研究集会「交流会」企画

テーマ：院内看護研究・事例検討の取り組みの現状と課題について情報交換しよう

日時：令和4年3月18日（金）13：30～15：00

方法：Zoomによるオンライン研修 締結施設、大学からの話題提供とフリーディスカッション

参加者 44名

評価：実施後のアンケートでは、役立ったという意見が多く、院内看護研究をどのように推進するか、悩んでいるところだったので、各施設の情報を聞いて役立った、各病院の実情を知ることができた、各病院の研究アドバイザーの交流もあるとよい、ざっくばらんにディスカッションする場として、今後も機会を設けてほしいなどの意見が寄せられた。

4) その他

締結5施設の依頼による事業実績

昭和伊南総合病院 研究指導 11回、研究倫理審査 4回 担当：望月教授

事例報告会（令和3年11月20日開催）講評：吉岡講師、江頭講師、富田助手

伊那中央病院 メンバーシップ研修（令和3年6月30日開催）担当：井本講師
リーダーシップ研修1回目（令和3年9月8日開催）

担当：井本講師

リーダーシップレベルアップ研修（基礎編）（令和3年9月30日開催） 担当：吉岡講師

リーダーシップレベルアップ研修（実践編）（令和3年11月16日開催）担当：吉岡講師
リーダーシップ研修2回目（令和3年12月15日開催）担当：井本講師

3 今後の課題

臨地実習に行けなかった学生の教育支援に関する研修や臨地実習の経験が乏しい新人看護師の現状に関する情報交換会は、看護教育の現状課題に即したテーマであり今後も継続が必要である。

感染状況をみながらリモート研修を中心に各事業を継続発展させていくことが課題である。

リーダー：喬炎

メンバー：北山秋雄 屋良朝彦 小野塚元子 熊谷理恵 星幸江 白川あゆみ 米久保篤
(事務局長)

1 令和3年度の活動

1. 共同研究・受託研究の窓口としての活動とその後の研究の発展

- 1) 「遠隔看護システム機器の開発」事業は継続的に行われた(代表者：健康・保健学分野 北山教授)。
- 2) 駒ヶ根市における先端的 ICT を用いた特定健診受診者のフォローアップシステムの構築に関する研究(代表者：健康・保健学分野 北山教授；駒ヶ根市地域保健課 浜；有限会社キャリコの代表取締役小林正信、担当 小平準)
- 3) 「精神障害者自立支援」主に伊那谷を中心とした精神障害者の自立支援のためのピアサポートの会「ピア南信しあわせの種」の設立に、精神看護の星助教とともに参加。10月から、月1~2回程度、学内外でミーティングや各種イベントを開催した。(哲学・倫理学 屋良准教授)
- 4) 「在宅看護介護用センシング技術の褥瘡診断装置の開発に関する共同研究」(継続国立研究開発法人産業技術総合研究所との共同研究、代表者：基礎医学・疾病学分野 喬；国立研究開発法人産業技術総合研究所デバイス技術研究部門上級研究員魯健、同張嵐)
- 5) 「納豆菌膜の長期経口摂取による皮膚紫外線傷害の予防効果」は進行中
(旭松食品株式会社からの受託研究、代表者：基礎医学・疾病学分野 喬；旭松食品株式会社 三ツ井陳雄)

2. 「スマート看護・福祉研究会」での情報交換

今年度も引き続き「スマート看護・福祉研究会」の活動に参加した。定例会において、福祉機器やリハビリテーション装置の開発に関して大学教員・医師から、また開発された機器に関して参加企業の責任者から講演会が開催され、意見交換を行った。

3. 伊那谷アグリノベーション推進機構での情報交換

伊那谷アグリノベーション推進機構の運営また、本学は伊那谷アグリノベーション推進機構の運営メンバーとして活動を参加した。

4. 長野県における産学官連携団体への参加と産学官連携に関連する情報の提供

今年度も引き続き、「信州メディカル産業振興会」並びに「AREC・Fii プラザ」の活動に参加している。

2 今後の活動にむけて

現在、本チームでは主に産学連携事業が中心となっている。他大学では自治体と協定を結んで学官連携の事業も行われている。看護学の先進的研究・教育機関である唯一の県立大学として、地域とともに更なる発展を目指して活動全体を見直していくことが必要となっている。

「スマート看護・福祉研究会」について

スマート介護・福祉研究会は公益財団法人長野県テクノ財団 伊那テクノバレー地域センターを主体に 2011 年 9 月に発足し、介護・福祉分野を中心とした調査研究を実施して来ました。しかしながら、高齢化社会における様々なニーズに対応するために、2014 年より調査研究の対象を「看護分野」まで拡大し、研究会の名称を「スマート看護・福祉研究会」と改称を機に本学が参加しました。研究会は研究者の技術開発を看護・介護や福祉分野に生かすことで産業振興を図るとともに高齢者やその家族が安心して暮らせる地域づくりにも貢献し、産学官の連携により企業と大学による看護・介護機器の共同開発を目指しています。本学から喬と小野塚元子講師がメンバーとして定期の会議に参加しています。

「伊那谷アグリイノベーション推進機構」について

伊那谷アグリイノベーション推進機構は信州大学農学部が中心となり、2013 年に発足しました。機構は、持続可能な開発目標 (SDGs) を達成できる循環型地域社会の創造を目指して、地域の豊かな自然と人が共生できる農を基盤とした産学官連携により「地域の農林畜産業、食品産業及び関連産業を活性化する『信州モデル』を創造する」ことを目的としています。機構は、教育研究機関 (信州大学農学部・長野県看護大学・信州豊南短期大学・飯田女子短期大学・長野県南信工科短期大学校・長野県南信農業試験場等) が蓄積してきた様々なシーズと企業・自治体・各種団体のニーズとのマッチングを図り、地域の農林畜産業、食品産業や観光業において、健康・長寿県である信州の強みを活かした新たな産業創出とグローバル教育を推進します。(伊那谷アグリイノベーション推進機構のホームページからの抜粋)

本学からは大塚学長が理事、喬が企画運営委員となっています。

「信州メディカル産業振興会」について

長野県の医療機器開発企業を中心に、企業・大学等教育機関・医療機関・行政機関・金融機関、その他 (個人) を構成員とする。会員数約 100 機関を構成。

事務局: 信州大学 学術研究・産学官連携推進機構 (信州地域技術メディカル展開センター内)

本学の担当者 (喬) は不定期に機構からメールや郵便物を受け、必要に応じて学内に関連情報を提供しています。

「AREC・Fii プラザ」について

「信州産学官連携機構」から「AREC・Fii プラザ」にシフトされ、本学は賛助会員となっています。

事務局: 一般財団法人浅間リサーチエクステンションセンター 信州大学繊維学部内

本学の担当者 (喬) は不定期に機構からメールや郵便物を受け、必要に応じて学内に関連情報を提供しています。

リーダー：安田貴恵子

メンバー：渡辺みどり 河内浩美 秋山剛 小野塚元子 柄澤邦江 伊藤郁恵 水主洋子
曾根千賀子坂本希世 下村聡子

1 概要

長野県看護大学教員の研究実績や専門性を活かして、駒ヶ根市の保健医療福祉の推進に貢献する。

2 活動実績

令和3年度は、令和2年度に引き続き新型コロナウイルス感染症の蔓延防止対策をとる必要があった。そのため、自治体の活動自体が縮小・変更を余儀なくされ、当チームの活動もそれに連動せざるをえなかった。一方で、学生の教育活動はコロナ禍においても充実させる必要があるため、令和2年度よりも臨地実習の準備のために実習施設や自治体と連携をとることが必要であった。また、新型コロナウイルス感染症の流行の波の変化が大きく、教育活動がその影響を受けるため、その変更に合わせて実習プログラムを複数用意するなど、教育活動に割かれる時間が増大した。そのようなことから、活動のための時間捻出に苦慮する状況があった。

1) 駒ヶ根市ネパール交流市民の会によるネパール国ポカラ市との協力事業への支援

駒ヶ根市は、ネパール国ポカラ市と国際交流を重ねてきている。ネパール交流市民の会が活動母体である。当会は、平成26年度よりJICA草の根技術支援事業の補助金を得て、「安全・安心な出産のための母子保健改善事業」に取り組み、平成29年度からは第2フェーズを展開している。自治体連携チームと国際看護・災害看護活動研究部門が連携して行っている。令和3年度は、JICA草の根技術支援事業への3回目（第3フェーズ）の申請に向けて、その実施計画の検討に参画した。（令和3年11月17日（水）に本学にて会議が行われた、本チームより、河内、安田が出席した。）

2) 長野県看護大学、町4区第4町内および上穂町第5町内合同防災訓練

本学は2つの地区の指定避難所となっている。防災委員会の活動に協力する形で今年度の防災訓練への参加を計画していた。しかし、開催予定の時期が、新型コロナウイルス感染症の流行時と重なったため、中止となった。

3 今後の課題

大学のある駒ヶ根市で行われている様々な活動に本学の教員は様々なかたちで参加している実態があると思われる。当チームのあり方を考えるうえでも、実状を把握することが必要と考えられる。

第5章 認定看護師継続教育支援部門

第1節 認定看護師継続教育支援部門の概要

部門長：渡辺みどり

メンバー：中畑千夏子 近藤恵子 細田江美

平成23年から看護実践国際研究センターに認定看護師教育部門を設け、「皮膚・排泄ケア分野」(H23～H24、修了者28名)、「感染管理分野」(H23～H28、修了者99名)、「認知症看護分野」(H25～R1、137名)を開講し、計264名の認定看護師を輩出してきた。

しかし、令和2年度から新たに特定行為研修を組み込んだ認定看護師教育が開始されることとなり、本学では教員の確保が困難なため認定看護師教育機関の認定期間が満了する令和元年度をもって、認定看護師教育を一旦終了した。しかしながら、各教育課程がしてからも、修了生からの本学に求めるニーズは高い。

そこで、令和2年度に修了生への継続支援ニーズをアンケート調査により把握し、令和3年度より県内の認定看護師のキャリア発達支援および認定看護師の連携を推進することを趣旨として「認定看護師継続教育部門」が設立された。

部門の所掌事項は、修了生への①教育・研究機会の提供、②研究活動に関わる支援、③認定看護師に関わる情報の提供、④その他認定看護師継続教育支援に関することである。

部門の構成員は、「皮膚・排泄ケア分野」の主任教員であった近藤恵子講師、「感染管理分野」の主任教員であった中畑講師、「認知症看護分野」の主任教員であった細田講師がそれぞれの教育課程修了生の分野別および個別対応を担当し、3分野共通の課題については全体で企画している。

第2節 活動実績

1 3分野共通の実績

各分野の所掌事項①～④の活動実績は下表のとおりである。

3分野ともに教育や研修に関する個別相談と学会発表、院内調査に関わる研究の個別指導の対応が行われた。キャリアアップに関する相談も3分野ともに実施し、具体的な内容は、大学院への進学、特定医行為研修への参加、認定看護師の更新などが主な内容であった。

2 分野別実績の特徴

「感染管理分野」では、新型コロナウイルス感染症の拡大に関連して、長野県が行う感染予防対策事業への人材活用に努めてきた。具体的には、高齢者福祉施設等の職員向けの研修会や軽症者宿泊療養施設の開設に伴う感染予防対策研修会の一部を担当する人材について、修了生から適任者を選定し、研修内容についても部門の教員と担当者間の相談によって決定した。

「皮膚・排泄ケア分野」では、特定行為研修への参加希望者が増え、その動向を見守りつ

つ相談や情報共有を行った。今年度内に特定行為研修を志したものが数名いる。研修会の情報提供については、本学を通じて、参加者を確保するという意図が大きかった。

「認知症看護分野」では、学会発表など研究の実績を重ねるものが多く、老年看護学分野教員と共同研究を推進する修了生や老人専門看護師へのキャリアアップを目指して本学大学院に入学する修了生もいた。その他、コロナ禍における認知症ケアの実践についての相談に応じた。

3 今後求められる活動

コロナ禍において、求められる役割も大きくなっているが、今年度に引き続き、学会発表への直接的な指導・助言、院内研究への支援、資格更新のための事例相談、研修会開催など修了生の子別のニーズに合わせて活動していく必要がある。

認定看護師教育課程 A 課程の教育は、2026 年度をもって廃止される。これを見据えて個々の修了生は、今後のキャリア形成を模索することになる。個別のキャリア形成支援ニーズに即して相談に応じていく必要がある。

活動内容	感染管理	皮膚・排泄ケア	認知症看護
①教育・研修機会の提供	個別指導 5 件	研修会の情報提供 2 件	研修会の開催 2 件
②研究活動に関わる支援	学会発表の指導 2 件	個別指導 1 件	学会発表などの指導 5 件 共同研究 1 件
③認定看護師に関わる情報の提供	キャリアアップに関する相談 1 件	キャリアアップに関する相談 1 件	更新に関する情報提供 4 件 CNS の進路相談 1 件
④その他認定看護師継続教育支援に関すること	実施せず		

第6章 看護教員・看護管理者教育部門

第1節 看護教員・看護管理者教育部門の概要

部 門 長：吉岡詠美

メンバー：北山秋雄 坂田憲明 安田貴恵子 井本英津子

1 所轄事項

- 1) 厚生労働省の認可を受けた看護教育養成講習会の実施とこれに関連する業務
- 2) 看護管理者育成の実施とこれに関連する業務

2 活動

本年度は、長野県内の看護教育者・看護管理者の育成を図る目的で以下の活動を行った。
なお、(1)(2)については、同日研修会を開催した。

- (1) 看護教員キャリア別研修会（新任期）の開催
- (2) 看護教員フォローアップ研修の開催
- (3) 看護教育者のための研修会の開催

第2節 活動実績

1 看護教員キャリア別研修会（新任期）および看護教員フォローアップ研修の開催

1) 看護教員キャリア別研修会（新任期）・看護教員フォローアップ研修の概要

(1) 目的

看護師等学校養成所の専任教員が、時代に即した看護教育の課題を認識することができるとともに、看護教育者としての知識・技術を習得し資質の向上を図ることを目的とする。

(2) 目標

- ①看護教員としての基礎的な実務能力を養う。
- ②積極的に研鑽に励み、看護教員としての実務能力の向上に努める。

(3) 開催期間・開催方法

令和3年8月26日（木）～令和3年8月27日（金）・(Zoomによるオンライン研修)

(4) 研修対象・参加者

長野県内の新任期にある看護教員および令和2年度看護教員養成講習会修了者
長野県内の専門学校・病院で働く看護教員25名と看護師2名（8/27は1名欠席）

(5) 実施内容の概要

①テーマ 「コミュニケーションスキルを活用した学生指導」

講師：吉岡 詠美（長野県看護大学 看護管理学分野 講師）

日時：令和3年8月26日（木）10:40～12:10

方法：講義

内容：学生の特徴の理解し、コミュニケーションスキル(ティーチング・コーチング)、学生とのコミュニケーションにおける工夫など具体的なコミュニケーションスキルの活用について理解を深めた。

②テーマ 「講義・実習のハラスメント防止」

講師：井本英津子（長野県看護大学 看護管理学分野 講師）

日時：令和3年8月26日（木）13:00～14:50

使用教材：株式会社フォーブレン「ハラスメント防止 eラーニング 2021」

方法：eラーニング視聴、グループワーク

内容：eラーニング教材を活用し、自己の日々の教育実践を振り返り、気づきと課題についてグループワークを通して共有しハラスメントに対して認識を高めた。

③テーマ 「学生の学びを引き出すカンファレンス支援」

講師：吉村恵美子先生（国際医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 保健医療学専攻 看護学分野 教授）

日時：令和3年8月27日（金）10:00～16:00

方法：講義、グループワーク

内容：看護基礎教育におけるカンファレンスの意義を知る、学びを引き出すと支援について考える、ファシリテーションの基本的スキルを知る、基礎看護実習カンファレンスをデザインするについての講義があり、その後意見交換を通してカンファレンスにおけるより具体的な支援について理解を深めた。

(6) アンケート結果

研修会終了後にインターネット上でのアンケートを実施した。回答者は、27名中19名（回答率：70.3%）であった。

各テーマに関するアンケート結果では、テーマ①コミュニケーションスキルを活用した学生指導について、「コミュニケーションの基本から学び直すことができた」、「普段の学生との関わりを思い起こしながら具体的に学べた」などの意見があった。テーマ②講義・実習のハラスメント防止について、「相手がどう感じるか、どういう意図があったのか、コミュニケーションを丁寧にとっていきたいと感じた」、「学生との関わりも考え直す機会となった」などの意見があった。テーマ③学生の学びを引き出すカンファレンス支援について、「学生がカンファレンスを億劫に感じない様に、教員は環境づくり、時間の使い方を考える必要があると感じた」、「カンファレンスを運営するには、やはり事前の組み立て、準備が大切であると学んだ」などの意見があった。各テーマについて、肯定的な意見が多いことから、概ね参加者のニーズに合ったものだと考える。研修の目標である看護教員としての基礎的な実務能力や実務能力の向上という点では、コミュニケーションスキル、ハラスメント、カンファレンスの指導ともすぐに活用できそうだという意見もあり、後期の実習等で活用できる内容だったと考える。

2 看護教育者のための研修会の開催

1) 看護教育者のための研修会の概要

(1) 目的

長野県内の病院で働く看護職が看護教育者（プリセプター）としての知識・技術を習得

し資質の向上を図ることを目的とする。

(2) 目標

- ①プリセプターとしての役割について理解できる。
- ②プリセプターとしてのコミュニケーションスキルについて理解できる。
- ③プリセプターとしての心構えができる。

(3) 開催期間・開催方法

令和4年2月16日(水) 13:00~16:00 (Zoomによるオンライン研修)

(4) 研修対象・参加者

長野県内で働く来年度プリセプターになる予定の看護職
長野県内で働く看護職と教育担当者など 91名

(5) 実施内容の概要

テーマ「初めてのプリセプターになる看護者のための研修会」

講師：吉岡詠美(長野県看護大学 看護管理学分野 講師)

方法：講義

内容：新人看護職員研修ガイドライン、プリセプターの役割、コミュニケーションスキル、プリセプターの心構えについて理解を深める内容であった。

(6) アンケート結果

研修会終了後にインターネット上でのアンケートを実施した。回答者は、91名中70名(回答率：76.9%)であった。

研修会参加者の概要としては、看護師経験年数が5年以下の看護師が全体の70%、看護師経験年数5~10年の看護師18.6%、看護師経験年数10年以上の看護師が11.4%だった。プリセプターの役割の理解について「とてもそう思う」42.9%、「そう思う」57.1%の回答があった。コミュニケーションスキルの理解について、「とてもそう思う」「そう思う」の回答が97.2%の回答があった。プリセプターの心構えの理解については、「とてもそう思う」40%、「そう思う」が60%の回答があった。研修内容はあなたの実務に役立つかについて「とてもそう思う」47.1%、「そう思う」52.9%であり、これらのアンケート結果より、新人教育を行う上で実践へつながる知識や方法の教授ができ概ね目標が達成できたと考える。

3 今後の課題

今年度の研修会はコロナ禍の開催であることから、感染状況を確認した上で、オンラインに変更にした。研修会の開催方法は、対面を希望される方、移動距離や感染状況を考えて zoom が妥当だったと考えている方など様々な意見があった。次回は、開催方法やアクセスを考慮した場所の選定など、検討する必要があると考える。研修会での内容は今後の実践に活用できる内容だったと考える。しかし、看護教員キャリア別研修会(新任期)については、看護教員としての基礎的能力を身につけ教育現場で活用していく上では、さらなる教育や支援が必要になると考える。看護教育者のための研修会については、新人看護師の育成をするためにプリセプター以外の看護師も支援者として関わるのが重要であるため研修会参加対象者についても検討する必要がある。今後、継続的な教育を行うことは看護教員や看護師のスキルアップだけでなく、県内の看護教育の質の向上につながると考える。

また、看護教員や教育担当者から継続的な研修会開催の希望もあるが、本学の教員は様々なかたちで看護教育に関わっているため部門としての役割を明確化するとともに、継続的に長野県の看護教育者、看護管理者の育成を支援できる体制づくりが喫緊の課題である。

第7章 キャリア形成支援部門

第1節 キャリア形成支援部門の概要

部門長：千葉真弓

メンバー：竹内幸江 松本淳子 有賀美恵子 高橋百合子 井本英津子 青木駿介
伊藤佑季 村井ふみ 花岡秀樹（就職支援員） 中村康子（学生支援員）

1 所掌事項

- ① 教育・研究機会の提供および研究活動に係る支援
- ② 進学、転職などに係る相談および情報の提供
- ③ 大学ホームページ等を活用して情報交換の場の提供
- ④ その他、卒業生・修了生のキャリア形成支援に関する調査・研究

2 活動目標

本学で看護学を修めた卒業生・修了生が、その後も実践を通して大学との交流を継続できるよう、キャリア形成支援部門が「魅力的な基地」づくりを目指す。

さらに、卒業生・修了生の新任期における職場定着や看護職としてのキャリア形成支援に取り組み、大学としての地域貢献の役割を果たしていく。

第2節 活動実績

1 部門会議

令和3年度の部門員は、千葉以下、竹内准教授、松本准教授、有賀准教授、高橋講師、井本講師、村井助教、伊藤助手、青木助手の他、花岡就職支援員、中村学生支援員を含めて11名であった。『令和2年度卒業生あつまれ！』の企画を中心に活動をおこなった。会議の開催は、メールでの稟議を含めて5回であり、内容は以下の通りである。

令和3年5月11日（火） Mail 会議	1. 「令和2年度卒業生あつまれ！」開催日決定 令和3年9月4日（土）14:00～16:00 開催方法 オンライン
令和3年6月11日（金） Mail 会議	1. 卒業生あつまれ企画について ・開催通知をメール、就職施設へ案内の郵送 ・開催チラシを作成し同封 ・今年度は事前参加登録をしてもうこととする ・事前参加登録は Google Form で

	<ul style="list-style-type: none"> ・チラシにはQRコードを掲載する <p>事前参加登録は8月20日（金）までとする</p>
<p>令和3年8月18日（水） 10時～12時 ZOOM会議</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「令和2年度卒業生あつまれ！」プログラム確認 2. オンライン開催における役割分担の確認 3. オンライン開催にむけたシミュレーション 4. アンケート（卒業生用、参加教職員用）の確認 卒業生用アンケート あつまれ企画への参加を問わず全員を対象にメールで配信する 集計担当確認
<p>令和3年9月4日（土） 14:00～16:00 ZOOM会議</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 令和2年度卒業生あつまれ！ オンライン開催 卒業生アンケート実施 2. 次年度に向けた振り返り
<p>令和4年2月10日（木） ～3月4日（金） Mail会議</p>	<p>次年度活動方針について</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 卒業生支援 1) 令和3年度卒業生あつまれ企画 日程：令和4年9月10日（土）14:00～16:00 開催方法：オンライン開催 ただし感染状況により6月頃に対面開催を検討する 対象：令和3年度卒業生 2. 卒業生情報の把握と同窓会からの情報提供について 大学と同窓会との連携・協働について話し合う必要性を確認した。

2 活動成果

1) 卒後1年目の卒業生に対する支援

(1) 「令和元年度卒業生あつまれ！」企画の実施

令和3年9月4日（土、14:00～16:00）にZOOMミーティングによるオンラインで実施した。卒業生86名中12名（60%）教員は15名の参加であった。

参加した12名の卒業生から、それぞれ簡単な近況報告をしてもらった後、教員を交えた小グループに分かれて近況や思うことなどを報告し情報交換をした。コロナ禍で臨地実習が十分にできなかった学年だったが、各々が卒後半半年間の成長の姿を報告してくれた。2回のセッションの後、ZOOM越しの記念撮影をして閉会した。

終了後アンケートでは、実際に対面で集まりたかったという声も多く、対面への期待が大きいことを感じる。次年度も感染状況をみながら、原則オンラインの方向で企画を検討する。

(2) アンケート調査の実施

卒後1年目の卒業生、85名を対象調査を実施した。

方法：Google Formsによるオンラインアンケート

目的：オンラインでのあつまれ企画に対する評価

卒業生の近況を把握し、今後のキャリア形成支援検討の資料とする。

調査内容：①職種・入職の動機、②現在の職場についての感想、③入職してから困っていること、④職場決定に際し学部生に伝えたいこと、⑤キャリア形成支援部門の企画等への希望、⑥近況報告などの6項目。

結果：卒業生5名から回答を得た

1) 職種：看護師2名、保健師1名、助産師2名。

2) 入職の動機（複数回答）

地元である、収入、興味のある仕事、勤務時間

教育研修の充実（2名）

福利厚生 of 充実、職場の雰囲気が良い、専門性が高い、自治体の規模（各1名）

3) 現在の職場についての感想は

満足している（2名）、こんなものだと思う（2名）という回答だった。

4) 入職してから困っていることについて

職場で困っていることについては1名が「ある」と回答していたが、具体的な内容は未回答だった。

5) 職場決定に際し学部生に伝えたいこと（自由記載）

可能ならインターンシップに参加できると良い（2名）

周りの意見等に振り回されず、自分で実際に見て感じ取ったものを大事にして決めると良い（3名）

6) 相談窓口の利用について

資格取得の相談で活用したい（2名）

7) 近況報告

5名からそれぞれの職場で慣れない環境や仕事内容に苦労しながらも日々頑張り、少しずつできることが増えてきている実感を持っている旨の報告があった。

考察：

回答者数は昨年度に引き続き少なかった。「卒業生集まれ」企画に参加した卒業生へはオンライン上で、学生時代のメールアドレスを介してアンケートを配信した。オンラインアンケートでは回答しやすさはあるものの、アクセス数は少なくなる考えられる。

回答数が少ないため卒業生全体の傾向を反映しているとは言い難いが、回答の内容を概観すると、就職動機は「地元である」ことが多く、現在の職場にはある程度「満足」していた。コロナ禍で実習等の臨地での経験が少ない卒業生ではあったが、職場での信任時期の手厚い研修体制などにより、一人ひとりがそれなりに自己の成長を確認できているようであった。

2) 2年目以降の卒業生に対する支援

本学の卒業生を対象に、キャリア形成の節目に卒業生が頼りにできる母校であることを願

って、卒業生の進学や資格取得等の相談窓口を設置したことを、大学 HP を通じて周知を図っている。令和 3 年度は保健師国家試験再受験の相談等 2 件の相談があり、該当担当者で対応した。今後も HP やアンケート調査等の際に相談サイトについてお知らせする等、周知方法を図っていく。

3 今後の活動

今後の活動については、令和 3 年度卒業生の「卒業生あつまれ！」企画の開催を 9 月 10 日に開催する方針で検討、準備する。

1) 喫緊の課題（懸案事項）

- ・卒業生の動向を把握するためのアンケート調査を同窓会の協力を得ながら実施する。
- ・卒業生に対する長期的な支援策（職場の悩み事相談、看護研究支援、進学相談、転職相談など）を視野に入れ、相談窓口への積極的なアクセスを促すために、各種の機会を通じて卒業生に相談窓口の周知を図る。

2) 将来的な課題

- ・卒業生の活動状況の把握や大学からの情報提供に向けて同窓会との連携・協働の具体的な方略を検討する。